

まざる 混・交

～大学内における焼却熱利用とコミュニティの形成～



背景

福山市では年間約15万トンのごみが排出され、可燃ごみは福山ローズエネルギーセンターでのみ処理されている。焼却熱の活用は、電力供給のみで昇温・冷暖房には使われていない。福山大学からも大量のごみを排出しているが、処理場がなく業者回収に頼っており、処理施設へのアクセスも悪い。

福山大学には、3381人（2025年度）の学生と約70人の留学生在籍しているが、地域住民や留学生との交流は限られており、コミュニティ参加に課題がある。

目的

①ごみ処理施設を設置し、学内のごみ処理し負担を軽減する。また、処理工程で生じる焼却熱を利用して電気エネルギーを生成し、銭湯のお湯を沸かしたり学内へ電力供給し光熱費を削減すること。

②ビザの関係で家が借りづらい留学生や非常勤講師、遠方から来た親族のための宿泊施設と飲食店を設ける。留学生や地域住民との交流の場を作ることで福山大学の知名度向上と新たなコミュニティ形成を図ること。

設計趣旨

福山大学は、山に立地し池や木も現存し坂道も多く地形を生かして作られている。今回の計画地は、福山大学に隣接しているためビルのような象徴となるような建物ではなく、土地に馴染む建物の設計とする。また、建物が用途と用途、人と人に新たな価値と価値観を与えるために「混」ぜ、そのために関わりの場を作り、コミュニティ形成のため人々を「交」ぜる。

宿泊施設 (1F、2F)

宿泊施設は、1階を留学生用、2階を一般宿泊者用とし、利用者が迷わない配置としている。客室は分散配置とし、建物内に自然な飲食スペースを生み出すことで、宿泊者・学生・教員が緩やかにつながる環境をつくり出している。敷地の地形に合わせて1階外周にデッキを設け、採光を確保しながら開放的な空間を実現した。また、伐採した木材を内外装や家具に再利用し、木質の曲面壁やロフト、丸太家具などを取り入れることで、ツリーハウスのような体験と周辺環境との一体感を感じられる宿泊空間としている。

銭湯 (B1F)

銭湯は北杉上池を掘り下げて階段状に整え、水を滴のように循環させる水盤を計画している。外周に隙間を設けた地下構成とカーテンウォールにより、水中にいるような開放感とプライバシーを両立した空間をつくる。浴室は和と洋の2種類を用意し、週替わりで男女を入れ替えることで多様な浴槽やサウナを楽しめる仕組みとした。電気風呂やジェットバス、漢方湯、塩サウナやミストサウナなど多様な設備を備え、何度訪れても新鮮さを感じられる魅力的な施設を目指している。

RF

2F

1F

B1F

屋上 (RF)

屋上は、対岸と同レベルにつなぐことで景観に溶け込み、建物の存在感を抑えながら周囲と調和させている。中央に天窗を設け、山型の起伏をつくることで光が枝の隙間から差し込むような木漏れ日の効果を生み、屋内に柔らかな自然光を取り込む。全面を緑化することで周辺環境との一体感を高め、屋上庭園として学生の休憩や交流の場として活用できるほか、広いスペースは軽い運動にも適している。

飲食店 (1F)

飲食店は客室の合間に席を配置し、間仕切りを減らすことで宿泊者や学生が自然に交流できる場としている。複数の店舗と専用席・共用席を設け、食事から軽食、アルコールまで幅広く対応し、共用席は交流や自習にも使える開放的なスペースとなる。夜間営業と宿泊施設の併設により、遠方からの来訪者も利用しやすい環境を整えている。